

パネル 4. 「茨城県指定 こがくぼうあしかがしげうじやかたあと 古河公方足利成氏館跡、こがじょうあと 古河城跡」



上記パネルの説明文の拡大

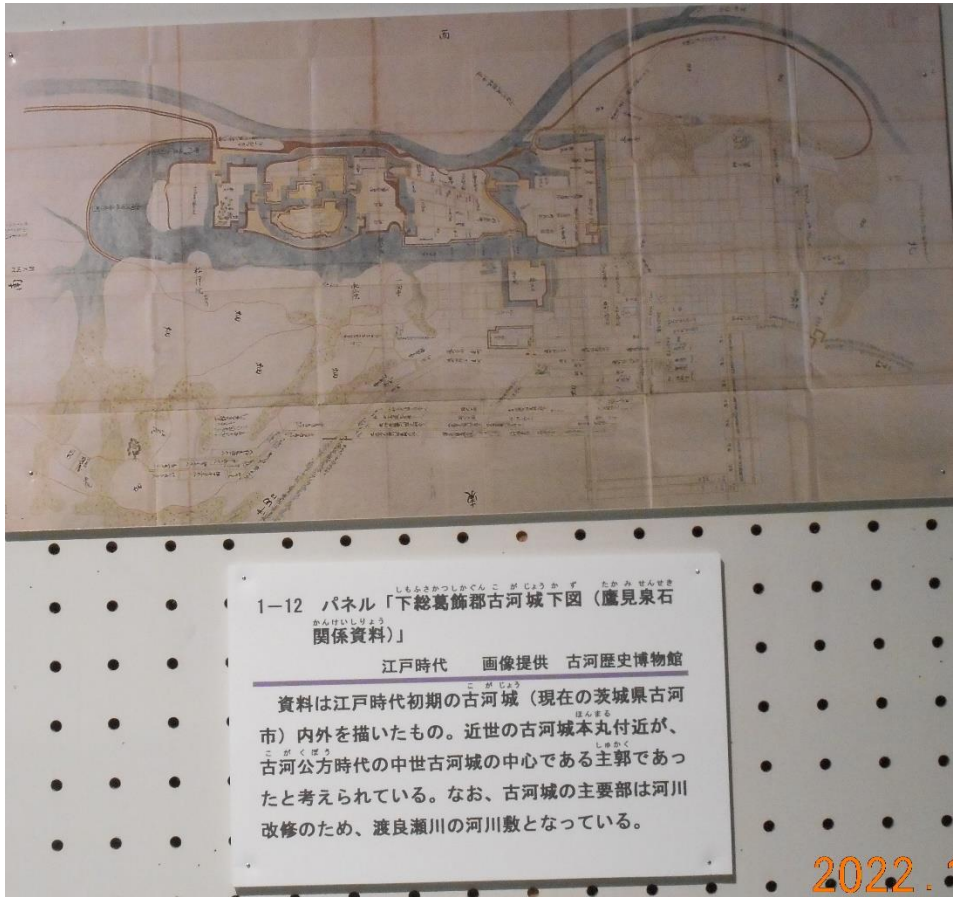
1-11 パネル「茨城県指定文化財 こがくぼうあしかが 古河公方足利  
しげうじやかたあと 成氏館跡 こがじょうあと 古河城跡」

画像提供 古河市観光協会

鎌倉公方足利成氏は、管領上杉氏と幕府軍の攻勢の前に鎌倉を放棄し、康正元年(1455)に古河(現在の茨城県古河市)に公方の館(御所)を移した(古河公方)。成氏が古河に移った理由は、古河やその周辺に公方の所領(公方御料所)があったこと、小山氏などの有力な支持者が近隣にいたこと、古河が水陸交通の要衝であったことなどが挙げられる。

成氏は後に渡良瀬川沿いの古河城に移るが、別館のあった当地は「鴻巣御所」ともよばれていた。資料は、古河公方館の跡地を写したもの。現在も、石碑の西側には堀跡・土塁が明瞭に残っている。

パネル5. <sup>しもふさかつしかぐん こがじょうかず たかみせんせきかんけいしりょう</sup>「下総葛飾郡古河城下図 (鷹見泉石関係資料)」



1-12 パネル「<sup>しもふさかつしかぐん こがじょうかず たかみせんせき</sup>下総葛飾郡古河城下図 (鷹見泉石関係資料)」

江戸時代 画像提供 古河歴史博物館

資料は江戸時代初期の古河城（現在の茨城県古河市）内外を描いたもの。近世の古河城本丸付近が、古河公方時代の中世古河城の中心である主郭であったと考えられている。なお、古河城の主要部は河川改修のため、渡良瀬川の河川敷となっている。

2022.1

パネル6. <sup>でんほりごえごしよあと</sup>「伝堀越御所跡」



同左パネルの説明文の拡大

1-13 パネル「<sup>でんほりごえごしよあと</sup>伝堀越御所跡」

室町幕府第8代将軍足利義政は、古河公方足利成氏に対抗するため、長祿元年（1457）、兄の足利政知を新たな鎌倉公方として伊豆国堀越（現在の静岡県伊豆の国市）に置いた。だが、政知は鎌倉に入れず当地に留まったため、「堀越公方」と呼ばれた。享徳の乱の終結により、伊豆国を堀越公方が管轄することになった。父政知の跡を継いだ足利茶々丸は明応2年（1493）、伊勢宗瑞（北条早雲）に倒され、堀越公方は、わずか2代で滅亡した。

1-13 パネル「伝堀越御所跡」

室町幕府第8代将軍足利義政は、古河公方足利成氏に対抗するため、長祿元年（1457）、兄の足利政知を新たな鎌倉公方として伊豆国堀越（現在の静岡県伊豆の国市）に置いた。だが、政知は鎌倉に入れず当地に留まったため、「堀越公方」と呼ばれた。享徳の乱の終結により、伊豆国を堀越公方が管轄することになった。父政知の跡を継いだ足利茶々丸は明応2年（1493）、伊勢宗瑞（北条早雲）に倒され、堀越公方は、わずか2代で滅亡した。

2022.12.06

### 3. 第2章 父と子と・・・<sup>おゆみくぼう えいしやう らん</sup> 一小弓公方前史：永正の乱の勃発と分裂する<sup>かんとうあしかがし</sup> 関東足利氏



<sup>えちごのくに</sup> 越後国（現在の新潟県）の守護<sup>うえずぎし</sup> 上杉氏と守護代<sup>しゅこだいながおし</sup> 長尾氏の対立からはじまり、千葉氏をはじめとする関東の諸勢力を巻き込んだ「永正の乱」<sup>えいしやう らん</sup>（永正3年（1506）～永正15年（1518））は、古河公方<sup>こがくぼう</sup> 第2代足利政氏<sup>あしかが</sup>と子の足利高基<sup>あしかが</sup>との関東足利氏内部の政治的対立に移行した。

当時、古河公方政氏は、高基の弟<sup>こうねん</sup> 空然を関東の宗教界の中心である鶴岡八幡宮寺<sup>つるがおかはちまんぐうじ</sup>の管理者である雪下殿<sup>ゆきのしたどの</sup>（鶴岡八幡宮若宮別当・社家様）<sup>つるがおかはちまんぐうわかみやべつとう</sup>に据えて、関東の聖俗を掌握していた。いわゆる「公方一社家体制」である。しかし、父と兄が対立する中、当初は雪下殿として父を支えていた空然は、還俗して「足利義明」<sup>あしかがよしあき</sup>と名乗り、第三の政治勢力として活動することになった。

抗争の過程で支持勢力を失った公方政氏は高基に屈服し、久喜の館<sup>くきやかた</sup>（現在の埼玉県久喜市）への隠棲を余儀なくされた。その頃、下総国<sup>しもつまのくに</sup>高柳<sup>たかなぎ</sup>（現在の埼玉県久喜市）にいた義明は、雪下殿としての權威に加えて、父政氏の政治権力を引き継ぎ、兄の高基と対立を深めていった。

本章では、小弓<sup>おゆみ</sup>（現在の中央区生実町）へ入る前の義明の前半生について、父政氏と高基・義明兄弟の三者鼎立状態から、高基と義明の兄弟対立へ移行する過程を紹介する。

パネル2 つるがおかはちまんぐうわかみや  
「鶴岡八幡宮若宮」



同左パネルの説明文の拡大

2-4 パネル「鶴岡八幡宮若宮」

中世社会では寺社が政治勢力としても強大な勢力を有していた。そのため、鎌倉公方は寺社の別当（管理者）や僧侶の任命権を握ることで寺社を統制し、政治と宗教における自身の関東支配をより強固なものにしようとした。

鎌倉公方は東国武家社会で厚く崇拝された鶴岡八幡宮を重視し、同社を管轄する「若宮別当」に子弟を任命した。別当は「社家様」または「雪下殿」とも呼ばれ、関東の宗教界において絶大な権威を有した。資料は、鶴岡八幡宮が当初建っていた場所に立つ同宮若宮である。

パネル3. たかやなぎごしよあと  
「高柳御所跡」



2-5 パネル「高柳御所跡」

公方が古河（現在の茨城県古河市）に移ったことに伴い、鶴岡八幡宮若宮別当（雪下殿）も鎌倉を去った。家臣の社家奉行人から「上様」と尊称された雪下殿は、古河公方と一体となって「両上様」として関東の政治と宗教を支配した。

埼玉県久喜市高柳にある臨済宗宝聚寺は、かつて「高柳御所」と呼ばれ、雪下殿の居所として定尊・尊敬そして空然（後の足利義明）が在住した。他の資料から、永正15年（1518）4月26日には義明は高柳にいたことがわかっており、この地より「総州（現在の千葉県北部・中部）」へ発つたと考えられている。

パネル4. <sup>かんとういん</sup>  
「甘棠院」



同左パネルの説明文の拡大

2-9 パネル「<sup>かんとういん</sup>甘棠院」

子の古河公方足利高基との抗争に敗れた前公方足利政氏は、小山氏の祇園城（現在の栃木県小山市）に移り、さらに久喜の館（現在の埼玉県久喜市）に隠居した。その後、永正16年（1519）に、政氏は館を寺院に改めて永安山甘棠院と称し、子（一説には弟）の貞厳を開山とした。境内の四周に空堀がめぐらされ、北側には土塁も築かれている。また、政氏の墓塔も現存する。大正14年（1925）には「足利政氏館跡及び墓」として埼玉県指定史跡となった。

パネル5. <sup>あしかがどうちようまさうじしよじょう</sup> <sup>うすだもんじよ</sup>  
「足利道長政氏書状（白田文書）」

2-11 パネル「<sup>あしかがどうちようまさうじしよじょう</sup> <sup>うすだもんじよ</sup>足利道長政氏書状（白田文書）」

永正14年カ 個人蔵  
画像提供 稲敷市立歴史民俗資料館

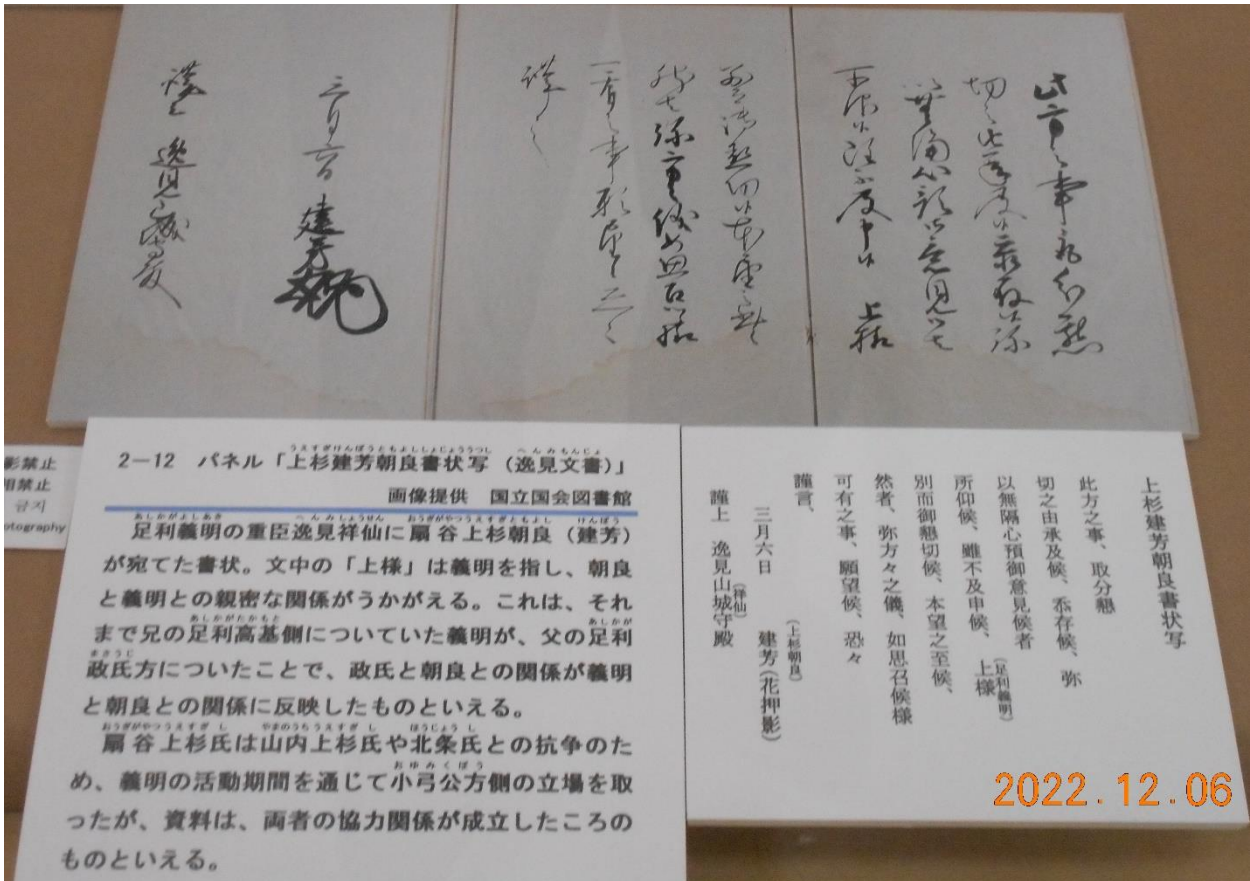
本資料は、<sup>えいしよう</sup>永正14年（1517）のものと同推測できる。

永正11年の時点での父の足利政氏対足利高基・足利義明兄弟という敵対関係から、当時は政氏・義明対高基の対立の構図に変わっていた。永正14年には、政氏と義明の関係は日をおって親しい関係になっていたことがうかがえる。また、この時点で<sup>こうねん</sup>空然から「義明」に改名していることがわかる。

書状の内容は、<sup>やまのうちうえすぎし</sup>山内上杉氏の家臣であった<sup>うすだし</sup>白田氏に対し、政氏が当時は高柳（現在の埼玉県久喜市）にいた義明に忠節を尽くすことを命じたものである。

（注：本文書そのものは、撮影していません。）

パネル6. 「上杉建芳朝良書状写 (逸見文書)」



2-12 パネル「上杉建芳朝良書状写 (逸見文書)」

画像提供 国立国会図書館

足利義明の重臣逸見祥仙に扇谷上杉朝良 (建芳)

が宛てた書状。文中の「上様」は義明を指し、朝良と義明との親密な関係がうかがえる。これは、それまで兄の足利高基側についていた義明が、父の足利政氏方についたことで、政氏と朝良との関係が義明と朝良との関係に反映したものといえる。

扇谷上杉氏は山内上杉氏や北条氏との抗争のため、義明の活動期間を通じて小弓公方側の立場を取ったが、資料は、両者の協力関係が成立したころのものといえる。

上杉建芳朝良書状写  
 此方之事、取分懇  
 切之由承及候、忝存候、弥  
 以無隔心預御意見候者  
 所仰候、雖不及申候、  
 別而御懇切候、本望之至候、  
 然者、弥方々之儀、如思召候様  
 可有之事、願望候、恐々  
 謹言  
 三月六日 建芳(花押影)  
 謹上 逸見山城守殿

2022.12.06

以上